

附近の諸國に使したことは有名な事實で、陳誠はその際の見聞を記した使西域記なる書物まで書き残したのであつたが、その使を奉じたのは永樂十二年が初めてであつたと思はれる、尤も此の十二といふのは自分の推察であるが、明史哈烈傳によると、十一年に哈烈 (Herat) を初めとして西域諸國の使臣が入貢したので、帝は大に喜び、その歸るに及んで、「命中官李達・吏部員外郎陳誠・戸部主事李暹・指揮金哈藍伯等送之、就齎爾書・文綺・紗羅・布帛諸物、分賜其酋、十三年達等還」と見え、撒馬兒罕傳によると、「十三年遣使、隨李達・陳誠等入貢」と見えて居るから、其の出發したのは多分此の十一年と十三年との間なる十二年であらうと思ふのである、明史撒馬兒罕傳や哈烈傳等に従ふと、陳誠は此の後十四年と十八年との二度使を西域に奉じたので、都合三回の使命を果したものであるが、この以前には何等此の人の西使の事實は見えて居ないから、これが既に洪武十二年に西に使したとは信じ難い、尤も釋義には洪武十二年に陳誠・李暹等が「使西域至其國、凡五往返、均相得、諒遂同使臣東來入觀」と書いてあるから、馬沙亦黑は十二年に來朝したといふのではなく、陳誠等が五往返の間何れかの時に伴はれて來朝したと見るべきで、その年次は此の文では判然分らないといはねばなるまいが、それにしても高皇帝、即ち太祖洪武帝の朝に入觀した人であるから、それが何年であつたにしても永樂十二年以後に於て屢西方に差を奉じた陳誠等と共に來朝したとするのは、其の間に大なる矛盾があつて、到底事實とは認め難い、假りに釋義に記する所を大に信賴して、洪武十二年に夙くも陳誠が西域に使したものとすれば、少くとも當時二十歳以上の年齢には達して居たものと見なければならぬが、かくすると永樂十八年の使に任じた時には、既に六十一歳以上の老齡に及んで居る譯である、支那と西域との遠隔した難路の旅行に、態々かゝる老人を煩はしたものは思はれない、されば洪武の朝